

超越主義者 Thoreau と Whitman

川 津 孝 四

I

Walden の著者 Henry David Thoreau と *Leaves of Grass* の著者 Walt Whitman, この二人は種々共通点や類似点を持っていたが人間として明らかに違った点を色々持っていた。前者は儉しく、簡素で、自己完成型、後者は非常に総括的で、同情的な型。この二人が始めて会ったのは 1856 年の秋 11 月のことであつた。それは Brooklyn の Whitman の母の家に於いてであつた。Thoreau は十年以上も前から測量の仕事の時々していたが、農場の測量をすることもあつたり、Bedford への近道を設計したり、その他色々な所で測量をした。New Jersey の Perth Amboy では大きな地所の測量をするのでそのために 1856 年の秋に一週間程過した。その際、New York や Brooklyn を時々訪ずれたが *Leaves of Grass* に興味を引いていた彼が Alcott と共にその著者 Whitman を訪ねたのはこの折であつた。それは 11 月 9 日日曜日の午後であつた。然し残念乍ら Whitman は不在で、そのお母さんから Walt のことを色々聞いた。そのお母さんは堂々とした、かつ賢明な婦人で、息子の Walt を絶対に信じて居り、如何に善良な息子であるかを話し、また、二人の女姉妹と四人の男兄弟が如何に彼を愛しているかを、然もなお彼の助言を如何に受けているかを話した。そしてその母は Walt が月曜の午前に皆さんに御会いしたら喜ぶでしょうといった。次の日に Thoreau 達は Philadelphia の Mrs. Tyndale と一緒に Whitman に会つたが、その会談の時間は二時間位であつた。この会見の前後のことは Alcott の日記に委しく書かれているが、Alcott はその前にも Whitman に会つたことがあつた。彼等は Concord に帰ると Whitman のことを色々な人に話した。Sanborn もそれを聞いた。

Sanborn は Emerson からその前の年に *Leaves of Grass* の初版を一冊貰った時に聞いたと同じ様に相等熱をこめて彼等が Whitman のことを話すのを聞いた。(Sanborn:—*Life of H.D. Thoreau*. P. 382)

幾年もの後、Emerson が Thoreau の葬式の時の頌徳文（それを Sanborn も聞いた）中で、

「晩年に Thoreau に深く印象を与えた三人の人がある——それは John Brown (1857 年と 1859 年に) と Maine で彼のインディアンガイドだった Joe Polis (1857), それに第 3 の人は皆さんの御存じない方」

と言っているが、その第 3 の人とはとりも直さずこの Whitman のことをいっているのだと Sanborn は思った様である。

それ程よそ目にも印象深かったとすれば、Thoreau 自身はどんなに思ったかまらず彼の手紙等から考察してみよう。

Thoreau はこの会見後間もなく、1856 年 11 月 19 日付で H.G.O. Blake 宛に書き送っている。

「吾々は翌朝 Whitman を訪れた (A. は既に彼に会ったことがあった。) そして、ひどく興味を持ち、感動させられた。彼は明らかに、この世で最大の democrat だ。王達や貴族達は直ちに棄てられる。ずっと前からそれが当然であったのだが。粗いが目だって強い性質、やさしい気だてで、その友人達からはひどく尊重されている。その外見は赤い膚 (どこもかも?) をして、私は彼については未だ少々困惑の体である。——兎に角、彼は私にとっては本当に奇妙に思われる。だが私は彼の様子に驚いた。彼は非常に幅広いが、私が言った様に立派ではない。彼は私が彼を誤解していると言った。私にはどうもそれがはっきりしない。彼は乗合馬車に乗って御者の側に座して、車の音を聴き乍ら、時には声を張り上げて、Homer を朗読したり、身振をしたりし乍ら、終日 Broadway を往来するのが好きだと言った。彼は長い間色々な新聞の編集者であり、また執筆者でもあったし、——かつては 'New Orleans Crescent' の編集者でもあった。だが今は何の職業も持たず、唯午前は読んだり、書いたりし、午後は散歩

する。他のあらゆる走り書きする手合いと同じ様に。」

これによって分る様に Thoreau は Whitman に始めて会って、その風貌とその態度とその言葉にいささか驚きと困惑と感動と親和と興味を感じた様であるし、「明らかにこの世で最大の democrat」とさえ思った。瘠せていて鼻高く、顔色もすぐれず、人との応待がぎこちなく然も内に強い信念をもっていた Thoreau と、体が幅広くがっちりして赤ら顔で、然も気だてがやさしい Whitman との会談は誠に面白い組合せて、その相違点は Thoreau にとってかえって一種の魅力であったかもしれない。粗野で、目だて強い性格は色合の違いこそあれ共に劣らぬ共通の点であろう。この相似点は二人をおのずから近附けたであろう。「彼は私が彼を誤解していると言った」が当の御本人である Thoreau にそれが何の事かよく分らなかったのだから他の者にそれが分らなくても仕方がない。「時には声を張り上げて、Homer を朗読したり」と言ったのを聞いて古典を愛読していた Thoreau は恐らく同感したであろうし、色々な新聞の編集者であった Whitman が今は何の職業も持たず唯午前は読書、午後は散歩と聞いてわがよい仲間が出来たと思ったであろう。

Thoreau は 1856 年 12 月 7 日にまた、H. G. O. Blake 宛に手紙を書き送っている。

「私がその人のことに就いて書簡したあの Walt Whitman は現在では私にとって最も興味ある事実です。私は（彼が私にくれた）彼の第二版をたった今読みました。それは長い間に読んだ如何なるものよりも私にとって為になる。恐らく私は一アメリカ人 Walt Whitman の詩、そして *The Sun Down Poem* を一番よく覚えている。その本の中には気に食わぬ二三のものもある。極控え目に云っても唯々官能的だ。彼は決して恋愛をほめたたえない。それは恰も獣がしゃべってる様だ。人々は理由なしに自分自身を恥ずかしがりはないと思う。勿論、その様な行為が赤面することなく複唱される所には常に穴がある。彼等の住民たちと競うことは価値がない。だがこの方面に於いてさえ、彼は私の知っている如何なるアメリカ

人或は近代人よりも更に真実を語っている。私は彼の詩が気分を引き立て、元気づけるのを知っている。その好色（肉感）に関しては、——見かけより肉感的でないことが分るだろうが——それ等の部分が書かれてないことをあまりに望みはしない。……

概してそれは何んなに割引しても私にとっては非常に勇ましく、且つ、アメリカ的に聞える。この国で今迄に説教された所謂説教を全部束ねても説教としてそれに匹敵するとは信じない。……

吾々は彼に大いに喜ぶべきだ。彼は時折少し人間以上の或のものを暗示する。彼を Brooklyn や New York の他の住民達と混同する事は出来ない。彼等が彼を読んだら、彼等は如何に身震いしなければならないことか！彼は恐らく善良なのだ。

成程私は時々少しは押付を感じず。彼の誠実と広い一般論で、彼は私を驚異を見る用意のある寛大な気持にさせる——恰も、私を丘の上か、平原の真只中に置いて、——私を感動させて、それから——千の煉瓦の中へ投げ込む。無作法で時として無駄であるが、それは偉大で原始的な詩である。アメリカのキャンプ中に鳴り響く警報か喇叭の音である。それにまた驚く程に東洋のものに似ている。私が彼に東洋のものを読んでいたかと尋ねたら、

「否、それについて話して下さい。」と彼が答えたことを考えている。

彼との対談は余り深入りしなかった——もう二人の人が居た——私がたまたま述べた二三の事柄の内、アメリカを代表するものとしての彼に向っての返答として、私は America とか、政治とか、などと云った事は余り考えないと云うことを云ったのを記憶するが、それは少々彼にけちをつけた事になったか知れない。私は彼に会ったことがあるので、彼の本の中の自慢とか自我に自分の心を乱されはしないことを知っている。……

彼は偉大な奴である。」

この Thoreau の Blake 宛の手紙は Whitman に会った後間もなく書き送ったもので当時の印象をそのままに書いている。これに対して

Whitman の方は Thoreau についてのこの時の印象記録を残していないので残念である。しかしこの関係において、*Specimen Days in America* 中の Thoreau についての陳述を吟味することは興味あることである、1881年9月17日に Concord を訪れた時 Whitman は Emerson, Alcott, Cousa Alcott 及び他の Concord の友人達に会った。そして、彼は誌している。

「Henry Thoreau の事に就いて随分と話した。それと、彼への手紙や彼からの手紙、——彼の生涯と運についての幾らかの新しい輝き——Margaret Fullerによる最もよいものの一つ、Horace Greeley, Channing 等による他のもの——最も風変りで興味ある Thoreau 自身からのもの。」

この Concord 訪問の時に Whitman は Thoreau について高い評価を示したと Sanborn が Salt に知らせたと Salt は書いている。

(Salt: —‘Thoreau’, p. 119)

Whitman は *Specimen Days in America* 中でまた次のように書いている。

「Hawthorne と Thoreau の墓の所で半時間。私はそこを去って、勿論、徒歩で行った。そして長い間思いに耽った。それ等の墓は墓地の丘 ‘Sleepy Hollow’ の可成上の方の心地よく樹の茂った所に接近してある。……それから Walden Pond へ、あの美しく樹に取り囲まれた水面、そこでは一時間以上過した。Thoreau が独居の家を建てていた森中の地点には今は唯その場所を標す石塚があるだけ。私も石を一つもって来て、その堆積の上へ置いた。」

(Walt Whitman's *Specimen Days in America*, September 1881)

(私が昭和 39 年にそこを訪れた時私もそのことを憶い出して Whitman と同じ様に堆積の上へ石を更に一つ、色々な感慨と共に置いて来たことを附記して置きます。)

II

Thoreau の英国の友 Cholmondeley が Thoreau を Concord に訪ねて後英国に帰ってから東洋関係の本を四十四巻 Thoreau に送った。Thoreau はその贈物のお返しにアメリカの本を送ったがそれ等の本の中に Whitman の *Leaves of Grass* があった。この本は 1855 年の夏に出版されたのであった。彼の友は London から返答をした。

(May 26, 1857) :—

「Walt Whitman の詩はイギリスでは笑われ、いやなものと思われているとのみ聞いている。ここに実際 ‘Leaves’ がある！ 私は *The Book of Enock* とか Daniel の未刊行の詩と同じ様にそれを理解することが出来ない。私は実際にその人に触れてでないとそんな人間が生きているとは信じられない。東洋に於いて、Buddha が私の背後にある以上に、彼方西洋に於いて彼は私よりずっと前にある。私は少なからず激しさと卑猥を混えた reality と美を見出す。——その二つともに私にめめしく思われる。私は彼の性的精力についての見地を面白く思った。然しその見地はとてつもない誤りである。紳士はあの本に全々眼もくれないのを見る！ この ‘Leaves’ は全く私を当惑させる。実際に Whitman? の様な人間がいるのだろうか？ 誰かが彼を見たり手で触れたりしたろうか？ 彼の言葉はイギリス人には分らないものだ。それは ‘New book’ と云わねばならない今迄に見た最初の本だ。——その本の印象を要約すると斯くの通りです。」

Cholmondeley は翌年の 1859 年 11 月に Concord を訪れた時、Thoreau や Emerson や Alcott やその他 Whitman に会ったことのある人々の話を聞いて Whitman がなかなか偉い所のある真実の人間であることを知った。しかし英国でも ‘Leaves’ が最初理解されなかったように Concord でもその著者と交際することを嫌った人は多かった。Whitman の友人達は彼を自分の家へ招待しようと望んでも、1860年の春彼が Boston

にいた時のように 'Leaves' の新版を出した彼を Sophia Thoreau にしても Mrs. Alcott にしても Mrs. Emerson にしても彼を招待することには反対をしめた。それだから 1881 年に彼が Concord を訪れて Emerson 家で食事をした時まで 21 年もの間決して彼は Concord を訪れなかった。その食事をした前日には Sanborn の家で Mr. Alcott や Louisa と共にみんなと会っていた。その時には Thoreau もその sister も Mrs. Alcott も既に故人になっていた。恐らく Thoreau が若し生きていたら喜んで会っていたことであろうし、その他の者も喜んで会っていたであろう。というのも Civil War 中の Whitman の行動や彼のいろいろな本がその頃までには一層よく親しまれていたのだから 1860 年頃とはその受取られ方が非常に変わっていたからである。

Sanborn の友人 Morton が Cholmondeley の母の再婚した Rev. Zachary Macaulay の牧師館で 1859 年のクリスマスの時一緒に食事をした時は Cholmondeley から聞いた所によると、Cholmondeley が *Leaves of Grass* のよい所を読んだと、Macaulay 氏は私は「そんなものを聴き度くない—若し続けるなら、それを火の中へ投げ込んでしまおう。」といったそうだ。(Sanborn:—Life of H. D. Thoreau, p. 310)

このように理解されず嫌われていたが、その後、Whitman の詩は England で非常に賞讃されるようになり、数人の評判のよい英人が Whitman 風の詩を書くようになった。

Cholmondeley は 1859 年 Thoreau から Whitman びいきの話を聞いて、自分の意見を修正しなければならなかった。

とに角 Whitman の *Leaves of Grass* が世間から理解されずいろいろ批判されていたにもかかわらず、いち早くこれを認め、その著者 Whitman に会ってその人物に対しても非常な魅力を感じてこれを高く評価した Thoreau こそ実に人の天分をいち早く見ぬき認めたよき批評家であり、予言者であったといわねばならない。

III

アメリカの超越主義の先駆的役割を果たしたユニテリアン派の牧師 W. E. Channing の説く所は神の力を信ずると同じくらい誠実に人間の能力も信じなければならぬし、神に人が依存するものであると同様人間には自由があることも信じなければならぬし、人間は神の内に生きるものであると同時に個性のある存在であることも信じなければならぬというのであった。そして人間は神を認識する理性的な能力を神から与えられており、人間の精神は神の性格に類似している。宇宙や自然を含めた神の創造物全てが人間に感知されたり理解されたりするのは神が人間の精神をそれ等に共通するものとして創造したからである。神の意志は神の造り賜うたものの内に一番よく現わされる。人間がそれを理解し得るのは人間の精神も神の意志の反映として創造されているからであり、神の意志はあらゆる造化の中に象徴されているので、吾々の周囲の到る所で神の存在を感知する。こうした思想は彼の 'Likeness to God' (神との類似性) (1828 年に F. A. Farley の聖職授任式に際して説教したもので、1830 年の *Discourses* に載っている。) や、'The Great Purpose of Christianity' (キリスト教の偉大な目的) (1828 年 Rev. M. I. Motte の就任式での講演) の中にも見られるものであり、こうして Channing によって準備された思想は大分超越主義的になっている。そしてやがて、神と自然と自己という三つの関連した存在の認識あるいは神への接近への手段として自己を拡大完成し、自然を深く探求するしかも底深い楽天主義、こうした超越主義の思想や特徴は文学的には Emerson, Thoreau, Whitman らによって益々立派に推進展開されて、アメリカ文学における黄金時代ともいうべき果実を結んだのでありそれに加えて、独逸の理想派哲学の影響もあれば、東洋思想の影響も少なくないことは申す迄もないが、Emerson が自然について冥想し、自己信頼を強め、Thoreau が森中に小舎を建てて独り自然に親しんで探求し、Whitman が自然と自己の歌をうたった時いずれもその思想

の出発点には Channing の影響があったことを感じないわけにはいかない。その最も根本的なことは「神は吾々の内に在る」ということである。

そして、また Channing の影響をうけて更に大きく広く思想大系を達成した Emerson の影響をうけていることにおいて Thoreau と Whitman は——勿論、相違点も多々あるが——よく似ている。

Channing はユニテリアン派の牧師を終生務めたが Emerson はその牧師の職をすて、Channing よりも更につつこんで自然の探求と自己拡大に努め、Channing の人間尊重の立場を更に拡大して、人間精神が宇宙のあらゆるものと直接自由に交感することを説いた。彼の *Nature* や *Self-Reliance* や *Over-soul* は超越主義思想の主要な面を最もよく表わしている。

Emerson の *Nature* では昔の人達がやったように、神や自然と直接に交わるべきだ。そして、われわれ自身の直感と哲学で、われわれに啓示された宗教を持つべきだということを主張した。Emerson はこの宇宙は自然と魂とから成り立っており、両者共に神の創造によるもので、「自分は神の一部」だからこの宇宙では同じく神の創造する所である自然の内に共通した親しみ深いものを感じる。自然は人間の欲求を物心両面で満してくれるものだが、それには人間の持つ最も高尚な美を求めようとする欲求が含まれている。そして Emerson の *Nature* における思考の発展は思想体系を一層大規模なものとしようとしている。

人間の魂と自然との究極的な一致ということは大抵の超越主義者達が考えていた所であったし、自然の中に入り込んで自分の手で働くことを理想として、Alcott の 'Fruit-land' のようにコミュニティを建設しようとした者もいたが、Emerson はそうした仲間には入らずにその Community は詩的情緒を無視していると批判した。Emerson は芸術は自然を映すものであり、神の創造した自然の美を再生することによって、人間の魂の最も高尚な欲求が満されるのだと、こうした芸術的行為を重視した。更に彼は自然の現象は多種多様であってもそこには自ら統一がある。精神は自然

に学ぶことによって神の意志を認識し、自分を完成に導く、全ての真理が互いに調和するのも自然のあらゆる現象がそこに統一があって神の意志を伝えるからだとした。

Emerson の思想がこのように自然の秩序の統一性を認識することから出発していることはそれまでの他の超越主義者よりも明らかに独自の進んだ地点に立っていたということが出来よう。Thoreau にしても Whitman にしてもこれとやや似た考えを持っていたけれど、Emerson は思想的理論家として両者よりも早くから顕著に、その講演において、その著作においてその偉大な力を示していた。Thoreau は Emerson の影響を勿論うけてはいるが、単なる弟子ではなく、類まれな実践家として、また東洋思想の影響をよけいにうけている点でも全く独特な大きな存在であった。Whitman もその思想においてこれまた Emerson の影響多大であるが、その前半世が政治ジャーナリストであったし、多分に超越主義的になってからも、彼独特な見方で自然をみ、殊に自己を視つめて、これを彼独特の調子で歌いつづけた点でまたユニークである。

神——自然——魂、この三つが渾然と融合統一した状態になってこそ人間の魂は高められ、その人は強力な独立者となり得る。神を信ずることは内なる自己を信ずることであり、自己信頼こそ大切なもので、その内なる声に従って、専ら自分の生活が本物であることを願い、世人の思わくなど気にすることは慎しむべきであるといった Emerson はまた非常に楽天的であった。これは達観した人生観からくるもので、その点は Thoreau も Whitman も同様であった。しかし Emerson や Thoreau にはどこかある意味で Puritan 的な謹厳さがあり、Thoreau にはなお、一見ストイックな所もあったし、また、体質性格からくる冷静さがあったにもかかわらず、やはり確乎たる楽天的態度があった。これは勿論その根本思想が楽天的であっからだ。

Whitman は一見多分に官能的な所があるが実際はそれ程でもなく、現実の処世からくる苦悩をふみ越えて、しかも体質容貌によって高められた

楽天的気風がありありと見受けられた。この場合もその根底に楽天的思想が強く作用していたはずである。

IV

Thoreau は Emerson と同じように超越主義審美家であったし、批評家でもあり、予言者でもあった。しかも Emerson よりも一層実践的であり、神秘的であり、更に極端であった。そして、Thoreau は Emerson と同じく、教会の権力や牧師の支配を拒否した。彼は宗教が個人的であるよりも団体的であり、詩的であるよりも政治的である故に形式的宗教に反対した。教会も牧師も真の宗教から離れていると思った。そして Emerson が牧師を棄てたと同じ理由で Thoreau は牧師の仲間入りをしなかった。しかし彼は大自然と直接霊交することによってより高い牧師たらんとした。そして彼は自らもいっているように (Thoreau's Journal vol 1. p. 464) 神秘家であり、超越主義者であり、その上、生来の哲学者であった。そして自然の全ての部分は乙女の髪全ての巻毛のように人の頭に所属するという Emerson の主張に賛同した。

Thoreau は Emerson と同じように真善美を追求したが、Emerson の理論的なのに対して彼は実際的であった。彼は信仰や理性によるよりも先ず経験によって確認しようとした。彼はいった。

「普遍的な法則を見出す様に私を急がせるな。その特殊な実例をもっと明確に見させてほしい。」と。(Thoreau's Journal. vol III. p. 157)

Thoreau はこのような態度で自然界の動植物やいろいろな現象を科学者のように注意深く観察し記録もした。しかし、彼は単なる科学者ではなかった。否、むしろ彼は結局は詩人であり、哲人であり、予言者であった。そして、

「自然のあらゆる現象は驚異と畏敬の眼で見るを要する」

(Ibid., IV, p. 158).

「人間は科学に於けるよりもその迷信（即ち、神話に於いて）本質的な

真理に恐らく一層近づくのである。」(Ibid.) とか、

「あらゆる詩人は科学の椽に立って震えている」(Ibid., IV p. 239) とか
かいている。

しかし、彼は哲学を全く否定しなかったように科学を否定はしなかった。そして、真の哲学、真の科学、真の詩は自然と調和して生活する実践的な人間の経験の中に一体となるそのような調和の内に生活することによってのみ、誰でも真の哲学、真の科学、真の詩を実演する適当な準備が出来ているのだと Thoreau は考えた。

Transcendentalists はしばしば宗教的見地から芸術を論じ、‘Soul’ とか ‘Salvation’ とかいった宗教的な言葉をその議論によく用いているが、この Salvation に関しても Emerson の理論的なのに対して Thoreau は一層実際のであった。そして、彼はアメリカの芸術の Salvation についてよりも実際の人間として個々の芸術家の Salvation のことに一層関心配慮した。

Thoreau は自然の原理そのものの発表よりも自然の事実についての詩的なあるいは神話的な陳述に余計関心を持って、

「私が事実をそれ程述べるのでそれは意味あるものとなり、神話になり、或は神話になるであろう」(Thoreau's Journal, III, p. 99) といっている。また、

「私が鳥や獣が好きなのは、それ等が神話的に本気であるからだ。」

(Ibid., III, p. 368)

同じように本気な詩人の見る眼は正しく、

「神が見るのに似ている。」(Ibid., I. p. 328)

と思った。

こうして自然との調和靈交によって経験した靈感やそのような靈感が参与している詩的生活は人間の最高の芸術の総計及び本質体を構成すると「生活の芸術」ということを強調した。

なお彼は

「詩人と謂われる人々に二つの種類がある。一つは人生を作り、他は芸術を作る」
(*Thoreau's Writings*, I. p. 400)

といい、かかる生活の実践者は Salvation の力と目的を共に現わすものだとした。また、

「私の生活は私が書きたい詩であった。だが、私は生活すると共にそれを表現するとして生活する事はできなかった。」

(*Thoreau's Writings*, I. 365)

といっている。成程書くために生活したのではなかったろうが、彼ぐらい自然に親しんで自然の美に浸たり大自然との靈交を感じながら、自分の生活を歌い、日記としてその経験や心境を絶えず書き続けた人はなかった。そして自然の美は最高の善であり、また自然の姿は最高の芸術を構成すると考えた。しかし、人間が何ら創作的な芸術を作り出さずに唯自然の姿を最高の美として静観するだけでは困るので彼は自然は神の芸術であり、神の自叙伝であると考えると共に、真の詩人の生活もその通りであると断言した。

こうした真の詩人としての生活はいかにして実現できるのか、そこに彼の Simple life の哲学があるのだ。世俗的な欲と目的で繁雑な生活にわずらわされているは駄目なので、あらゆる余計なものを棄て去って、できるだけ自然との靈交を保ち、自然界の理法摂理に合った true economy による生活をする事、これによって Salvation へ到達できるのだと考えた。

Thoreau は自然の中で美の生活を営むことが心を占める大切なことだったので Emerson に比して人間の芸術そのものについて語ることは少なかった。しかも人間の芸術は神の自然に比して貧弱なものだと考えた。

その劣る理由として二つの主なものを上げた。

(1)人間の芸術から得た経験は自然から得たもの程に豊富でない。(2)一般に人間の芸術の人心に与える効果は健全であるよりむしろ有害である。そして彼は「真の芸術は……人間の生活である。……自然のありのままの反映である所の復原した原物である。」
(*Thoreau's Journal*. I. p. 167)

「この様な作品に比べたら、ギリシャや伊太利の全ギャラリーは唯色彩の混合と準備的な大理石の切り出しに過ぎない。」(Ibid.)

ともいっている。

芸術作品としての生きた生活においてのみ芸術家は自然を反映し、神の崇厳な芸術に近づくことができる。詩的生活によってのみ——詩人であると同時に詩であることによってのみ——人間は神の芸術に近づき得る。ありのままの模倣によってではなく反映によって近づき得ると Thoreau は考えた。芸術そのものについても、

「核心に達しないで、唯表面を金めっきたり、表面的な磨きだけを要求する芸術は唯上すべりの細線細工に過ぎぬ。だが天才の作品は初めから荒けずりで、……また底光りを持っている。それは断片が壊れ落ちても尚分る。その物質の本質的な性質である。その美はその力である。」

(Ibid., I. p. 275)

と天才によるより高い程度の芸術を論じているが、その論の底にも哲人の簡素という彼の考えが示されている。芸術においても、自然におけるように、また真の哲人や詩人の生活におけるように簡素というものが大切である。一見豊富に見えてもそれは簡素がつけている仮面ともいえる。(Ibid., XI, 296) そういう意味で高尚な芸術は簡素であると同時に豊かさをもっている。そしてまた芸術は本来多分に自叙伝的なものであり、また芸術の最高の状態は巧まざる所にありと信じたが、その芸術の無技巧はその芸術が表わす生活の秀れた簡素さと豊かさから出てくると Thoreau は信じた。

V

Whitman も transcendentalist だったといっても Emerson や Thoreau とは大分違った所があったのは申すまでもない。

彼は 19 才から 30 才位までは主として政治関係やそのジャーナリズムで活動した。この事実は彼をアメリカ文明を代表する詩人たらしめる一つ

の重要な基礎となっている。

そして、彼は早くから熱心な民主党員であった。勿論これは彼の父の影響もある。彼はいろいろな新聞編集の仕事に従事したが、その多くは民主党系の新聞で、公然と民主党びいきの論説を書いた。例外的に食うために反対党のホイッグ系の新聞で働いたこともあるがそういう時は国内政治の問題にはふれなかった。

その頃までの彼の論説中に現われた思想には非常に理想主義的な democracy の原則を掲げながらも民主党の綱領には素直に準拠していた。彼は democracy の原則である「最良の政治とは支配することの最も少ない政治だ」ということを常に念頭においていた。この motto を胸中深く常にもっていたことは Thoreau も同じだ。また自由主義と個人主義を強く主張したことも Whitman, Thoreau 共に同じであった。

現実の政治関係ではこの motto の信奉者で民主党の創始者である Andrew Jackson やその後継者達が大統領や政府の力を強化するという実際問題と democracy の motto との間にギャップが生じても Whitman は特に注意しなかった。いわば民主党と democracy を同一視して讚美していた。Jackson 派の機関誌 'Democratic Review' の編集者 John O'sullivan の唱える 'Manifest Destiny' (明白な宿命) の思想は Whitman の心をとらえ、合衆国こそこの democracy という素晴らしいものを全国に広めるに最も適わしい国である。これこそ「明白な宿命」だと痛感した。しかしながら、時の大統領 James K. Polk はそれを合衆国の領土拡大策に利用して、テキサスを併合し、遂にメキシコ戦争を引き起すに到っても Whitman はなお「党」を支持していた。そして国の拡大は人間の幸福と自由の拡大と考えた。更に戦争反対派に対しては非愛国的とまで批判した。この場合 Whitman と Thoreau は全く相反していた。Thoreau は戦争に強く反対して、税の納入まで拒絶しそのために一夜投獄された程であった。

Whitman のこうした態度はいつまでも続かなかった。というのも、メ

キシコ戦争に勝利の結果アメリカが手に入れた新領土に奴隷制度を許すかどうかで国論が分かれ、民主党もまた二分した。ために Whitman はいずれを取るべきかに迷った。

彼は 'New York Aurora' 時代にある英人が米国の奴隷制度を批判した際、彼は「黒人奴隷と白人奴隷」と題して英国ではその国民の90パーセント迄が奴隷に等しい有様——いわば白人奴隷——ではないかと反駁した。また「飲んだくれ、フランクリン・エヴァンズ」(1842年作小説)では米国南部の奴隷はその主人から保護されているので、欧州の圧制下の国民に比してどんなに幸福であるかを物語っている。これは欧州諸国より米国が優位にあることを主張する彼の nationalism の現われでもあるが、要するに彼が党の方針に従っていた間は奴隷制度を積極的に支持しない迄もそれを黙認していたことは確かであった。しかし党の分裂と共に彼の態度も少し変わり、1847年4月22日の社説で「新しい州——奴隷州たるべきか自由州たるべきか」を論じて、在来の奴隷制度をとった州は干渉を許されないが、新州については、democracy の偉大な使徒たるもの、自由の側に神聖な力を注ぐことに躊躇するだろうか」と書いた。

当時奴隷制度廃止論の指導的な人であった William Lloyd Garrison は奴隷制を認めるような憲法を「死との契約にして地獄との協定」と罵倒したが、Thoreau は憲法よりも更に高い法に合衆国が従わないなら Massachusetts 州は国から脱退せよと述べた。これらの理想主義的態度に対して Whitman はより現実的で、憲法の枠内での理想主義といった態度であった。

なお彼は白人の自由労働者の擁護を念頭においていた。彼の「アメリカの労働者対奴隷制」と題する社説で奴隷制を認めている州では白人の自由労働者がみじめであるから奴隷制拡大には反対であるといっている。

民主党の内でも主流派は奴隷制の拡大を認めたが Whitman は次第にはつきりと攻撃する立場になった。彼が1848年1月 'The Brooklyn Daily Eagle' の職を追われたのもその為めである。一時南部の新聞で働いて後

New York に帰り 'Free Sail Party' (自由土地党) が結成されると、それを支持した。その党の綱領「自由な土地、自由な言論、自由な国、自由な人間」に彼は双手をあげて賛成した。しかし中心人物の Van Buren が大統領選挙に敗れると内紛を生じ、妥協嫌いの Whitman はその党の機関紙 'Brooklyn Freeman' の編集の職を去り、政党政治の現実に幻滅しかつ憤慨した。

彼は 1838 年頃から詩作をしていたが、1840 年代は自然や人生を歌ってもどこか感傷的であり、アメリカの democracy や民主党を歌う詩も何となく浅薄であったり、大袈裟な所があった。しかし、1850 年代になると America の政治家や政治の現実に批判的、冷笑的になりだした。そして逃亡奴隷取締法に憤慨し、奴隷狩はキリストを迫害するに似てるとし、また逃亡奴隷を捕えてその所有者へ引渡す連邦軍隊を皮肉っている。かく政治に対して嘲笑的になっているが、自ら政治や政党に直接関与しようとはしなかった。

彼はそれまで 10 年もの間政治ジャーナリストとして働きながらかく幻滅失望したのはかくれなき事実で生来楽天的だったとしても現実社会には相当辛酸をなめさせられたのである。

しかし彼はこの頃、仏の Rousseau や英の Carlyle そして、Channing 殊に R. W. Emerson の著書に親んで、人間の本来の力を再確認し、根本的な所から再び出発してこの社会の現実と理想とのギャップをいかになくすべきかを考えた。

かくして彼は Thoreau とも相通ずる所が多くなった。しかし見た所、物の表と裏の差以上の相違が感ぜられる。

彼の *Leaves of Grass* の初版が出たのは 1855 年で、これによって彼は現実のアメリカの欠陥を非難したり、冷笑したりするよりも理想とする所を展開讚美した。即ち、democracy の理想的 vision を唄い、高度の自由主義や平等主義を唱えた。彼の democracy は単なる外面的な政治的制度より更に進んで人間の精神的要素を大切に考える democracy であった。

国家の自然や国土がいかに大きくても国民の精神が貧弱であれば恐ろしいことだと思っただけであろう。広大なアメリカの国土のごとく広大な市民の精神を持ちそれをうまく表現し得る者こそ真の偉大な Democrat であり、真の詩人であろうと、自らかかる者たらんとした。この *Leaves of Grass* 中の *Song of Myself* はこうした心で自らを歌ったのだ。彼は肉体的であると同時に霊的な自己をみつめ、自己を宣揚すると共に他人との共通性を認め、「自己」を拡大し、完全な「自己」によって将来完全な世界を創造することを要望した。

この点 Emerson とも Thoreau ともよく似ている。

彼がセックスを歌ったのは、人間本来の力の現われであり、自己の再生、procreation の行為として讚美すべきだったからだ。

彼がかく自己に力を入れてその宣揚に努めたのはそれがアメリカの democracy の基盤である個人主義の窮極の姿であるからであり、アメリカ市民の不安模索に光明を見出すべき自己の精神的発見を表現するにあったからだ。

とに角、彼は *Leaves of Grass* 初版でアメリカ文明の理想を讃えているがそれは唯抽象的楽天的夢物語ではなく現実味を帯びた大きな vision であったが、これも南北戦争のためアメリカ国民の心に混乱が深まり、こうした彼の vision も崩れざるを得なかった。*Leaves of Grass* 初版出版後の数年は Whitman の心にも新たな混乱があったであろう。

彼は暫らく離れていた政治ジャーナリストに再びなり、彼の理想とする詩的 vision とはどうしても矛盾する現実の力に妥協を迫られた。彼は政党政治の腐敗を非難して、アメリカの救済は独立宣言殊に憲法の精神を尊重するにあるとした。けれども奴隷問題については既述のように現実的で、建国当初から奴隷制度をもっていた州ではそれを認めざるを得ないし、逃亡奴隷は所有者に返すべきだとした。そして、人間の権利の尊厳を認め、憲法の認める州の独立的權益を尊重し、アメリカの統一を守り得る人物を大統領に望んだ。

詩人としての理想主義と政治ジャーナリストとしての現実主義とのギャップは妥協しようとしてもむずかしいものようであった。

Whitman は新聞 'Brooklyn Daily Times' に勤めていた 1857 年から 1859 年頃には 'Free Lovers' や 'Abolitionists' をひどく批判したがこれは国の分裂を避けるためであった。そして、黒人は地球のどこか安全な広い土地で追々種族としてまた国家として存立することを望んだ。しかしいつそんなことが実現されるだろうか。彼はリンカーンよりも南部により妥協的なダグラスの中道を行こうとする政党を支持した。こうして彼がなめた苦悩はアメリカそのものの苦悩でもあった。

Leaves of Grass の第三版は 1860 年に出版されたがこれでも相変わらずアメリカの文明や人間の讚美はしているものの前述のような苦悩混迷に対してはそれから解脱してゆく方向を示し、現実的な政治社会に関するものはどこか諦観味を帯びている。

第三版の詩 *I sit and Look out.* で

I sit and look out upon all the sorrows of the world, and upon
all oppression and shame,

.....

I observe the slights and degradations cast by arrogant persons
upon labourers, the poor, and upon negroes, and the like;

.....

See, hear, and am silent.

「私は坐って眺める。あらゆる世の悲しみを、またあらゆる圧迫と恥辱を、

.....

私は視る、傲慢なる者どもが、労働者、貧者、黒人、及びその類の者達に浴びせる軽蔑と低級扱いを。

.....

私は坐って眺め、見、聞き、そして黙っている。」

と歌っている。

そしてこの第三版に新しく付加された詩の中核は生や愛や性や孤独そして何より死についての思想感情である。

死の力をまともに受けて、彼は「自己」を解脱しアメリカを解脱して宇宙的、宗教的、神秘的な世界、靈的な世界に今までよりも更に強く向い始めた。

その巻末の詩 *So Long!* の最後の所で

‘Remember my words, I may again return,

I love you, I depart from materials,

I am as one disembodied, triumphant, dead.

「私の言葉を記憶せよ。私は再び帰るだろう。

私は君を愛し、私は物質から去る。

私は肉体を離脱し、勝ち誇り、寂滅せる者の様だ。」と歌っている。

1861年に南北戦争が勃発したが彼はこの戦に対して政治的反応は見せず、リンカーンの奴隷解放宣言にも特に詩的反応はなかった。唯人道的献身的に特志看護の役を引受けて軍病院で働き続けた。彼は人間の果敢なきを体験して益々「死」に思いを致して、「死こそ救済」の境地を痛感し、リンカーンを悼む *When Lilacs Last in the Dooryard Bloom'd*. でも死を強い救済の女神と讃えている。これは彼が人生を悲感してのことではなく、超越主義者、汎神論者として、また仏教の影響もあって、涅槃を望んだともいえる。

彼の評論 *Democratic Vistas* (1871年出版) では南北戦争後のアメリカが腐敗墮落して、精神的なものを忘れて物質的な利欲の追求に夢中になっている状態を痛烈に批判して、道德宗教文学の上からも審美的な面からも欠けているところ大であると指摘した。それでもなお、政治的 democracy は現実にはいろいろな障害をはらみながらも、その理想的実現を将来に夢みている。そして人格主義に重点を置いて、普遍性と倫理的な志向によって建設に努力すれば、調和と安定のある世界が得られると主張する。こう

して彼の democracy は段々と宗教的神秘的色彩を帯びて、「自己」は全体の中に解脱して行った。彼は自己を脱出したのみならず、アメリカからも脱して、世界的宇宙的な色彩のあるものになって行った。

彼の *Passage to India* はこうした精神の過程を示している。そして、より偉大な全体的精神への航路をめざすのである。

Leaves of Grass の第六版 (1876 年出版) では現世よりも彼岸に希望を託していることを序文中にも述べている。そしてこれからは「死、永生及び精神界への自由な入境」を歌う積りといっている。かく彼は仏教的涅槃希求の宗教的心情に到達した。そして *Leaves of Grass* の第九版 (1892 年出版) が出た年の 3 月 26 日に肺炎がもとで他界してしまった。

VI

Whitman は他の代表的な Transcendentalists とは異って New England の Unitarianism の伝統中に育ったわけでもなく、Harvard 大学出身でもなかった。彼は New York の Dutch and Quaker Pietists の影響下に育ったのであるし、文学史家によっては超越主義者のグループに入れない者もあるが、他のいろいろな点を見れば、殊に根本的な汎神的自然観や人生観を見れば明らかに超越主義者として重視すべき人である。

彼は Emerson の著作に親しんで Emerson の信念と自分のとの間に似たところがあるのに気付きかつ喜んだ。しかし自分の相異点はそれを大切にしようとした。

彼は Emerson や Thoreau と同じように教会の支配に反対した。

彼はいった。

「合衆国には宗教と云う観念を単なる教会主義から解放し始める時代が確かに来ている。」

(Whitman's Writings, V. 191)

また、

「間もなく牧師はなくなるだろう。彼等の仕事は終わった。新しい秩序が興るだろう……そしてあらゆる人が自ら牧師となるであろう。」と。

(Ibid., V, 182)

彼は救済のための主要な力は教会や職業的牧師にあるのではなく、個々人の信仰心にあると。教会を否定し、職業的牧師の消滅を信じた。だから特別な意味では非宗教のように思われるが単なる教会主義にとらわれる牧師におけるよりは遙かに真の意味での宗教といえよう。この急進的な宗教を芸術や芸術家にも拡大し、それが芸術や芸術家がこの世で救済を得る力強い助けとなるものと考えたのも Thoreau と同じであった。彼らは教会や牧師を通してではなく直接に神聖な権威に交わることを求めた。その場合 Thoreau の方は自然の中の神による色彩が一層強く、Whitman の方は個人的宗教意識それもクェイカー派的な内的光による色彩が強かった。

Thoreau は全く自然の子といってよい位常に自然に親しみ自然の種々相を凝視研究すると共に自然との霊交を深くした。しかし彼は Harvard 大学出身であり、西欧の古典のみならず、東洋の古典聖典にも深く通じていた。その上に自然界の探求も深く、その点では Whitman よりも遙かに学者的であった。また自己に対する態度は Walden 湖畔の小屋におけるように、人間の生活の再吟味をやり、自分の魂を掘り下げてみつけ、自然との神秘的霊交に悟を開いた。決して人間嫌いではなかったが人間社会に住むよりも自然の中に浸っている方が多かった。

しかし Whitman は人間社会の中により多くの時間を過し、自然そのものに特に親しく接したのは 1873 年の病気後のことでそれによって健康を取りもどしたと思って、次のように書いている。

「殆んど二年間、断続的に、売薬や医薬を用いず、毎日戸外にいた事実のせいだと思った。……それ以前には決して、……そんなに自然に接したことがなかった。」と。 (Whitman's Writings, IV. p. 183)

Unitarianism を経て独逸哲学や東洋思想の影響をうけて到達した Emerson の Over-Soul や、Thoreau の Pantheism は Whitman の Pietism とは同じ神への approach としてもその相違は大分大きいのである。その過程は勿論その結果として現われるところにも大分違ったところ

がある。Emerson は理想的、思想的に自己の霊をより所としてこれを自然に拡大し、Thoreau は自然の中に表わされた匠匠や原理の合理的研究をも舞台とし、Emerson のように独逸理想主義の哲学の影響を受けながら、殊に東洋思想の根本的真諦をつかみ、なお、古典神話からの象徴的なものを自然をみる心の内に生かしている。Thoreau は禅僧のような生活をして、その Simple Life によって、最も大切な大自然との霊交によって、己が生活そのものを芸術としようとした。Thoreau の神秘的な汎神論は殊に東洋思想の大きな影響である。(これに就いては拙稿「東洋思想と H. D. Thoreau の文学」(香川大学十周年記念研究報告)を参照されたい。)

クワイカーそして Pietist の流れの中に Whitman は育ち発達した。そして「内なる光」によって、感情的な魂の内的な神を植えつけた法則に従うべきだとした。そして個人の良心、宗教的熱誠、恍惚的な天啓を重んじ、理性に関係せず、学問ある僧侶を必要とせず、自然の中で神を念頭におくことさえも必要としない。この自然神教者の立場は本質的には、非智的、非形而上学的である。それは霊を表わすものと考えられた個人的な良心あるいは意識で霊交によって神を認める直接実際の態度を取る。だから institutions (教会や教団) の権威支配に反対したといってもその訴え方は Emerson や Thoreau の場合と大分異っていた。自然神教者は自律の宗教的意識から、もっと直接に結論に達した。彼は教会や教団の権威を認めないばかりでなく、理性や観察の権威をもあまり重んじなかった。しかし自らが意識によってのみあらゆる行動を支配することは、どうしても弱点が出てくるので Whitman はそのことを *Democratic Vistas* 中の脚註で暗示している。だから Whitman は宗教的審美的立場において、徹底した自然神教者程に極端ではなく、その点では、Charles R. Metzger がいるように Elias Hicks と Emerson との中間位だと思われる。

(*Thoreau and Whitman* by Metzger p. 42)

更に Metzger は Thoreau について、この点では、期待されるよりも

穩健で、Emerson と Whitman との間位に想われるとっている。

程度のことは微妙なもので受取る人によって各々いろいろ差があろうがこれも参考になると思う。

Thoreauは独特な汎神論者として個人の靈の救済に深い関心をもち、自然美の中にその生活を芸術化しようとした。

Whitman は素晴らしい現象の自然界に無智ではなかったけれど彼が主として力を入れたのは人間の靈についてであった。彼はこの靈のことを三つの意味で考えた。それは個人的な意味と、一般の意味と、文学の意味とであった。

Whitman は弁護士や医者 of 書生をやったり、小学教師をやったり、大工もやれば通信記者もやり、新聞の記者にもなったけれど、天性放浪性を持っていて、同じ仕事を長く継続せず、そして米国南部地方や西部地方を旅行したりした。

このように彼の生活は放浪性をもっていた。こうしたところはThoreauもよく似ていた。それは忍耐力がなかったり、怠惰であったり、移り気であったからだと早合点してはならない。各々の生活上の事情もあるが、共に自分の自由を妨げる社会的束縛を嫌ったためであり、なお自己の完成のためや詩人的生活のためや、自然との靈交のためであった。

自由奔放を好んだのは生活ばかりでなく詩においてもそうであった。

一体超越主義者達は因襲を嫌い、詩風においても在来の韻律法や詩型を意識して打破しようとした傾向があったが、Whitman は特にそれが顕著であった。

彼の詩は奔放自在で、在来の詩の型式や韻律法によらないで、彼独特の自由な詩形をとった。しかも各々に心地よいリズムを作りだしている。彼はこの調子で靈的な自然を、また何ものにも邪魔されない自我を、自然の韻律で歌った。彼の詩集 *Leaves of Grass* の題は草の葉が母なる大地から生れるように、自然に己が胸中から生れ出ることを意味しているのである。

その詩集中の *Song of Myself* で

I celebrate myself, and sing myself,
And what I assume you shall assume,
For every atom belonging to me as good belongs to you.

私は自己を祝い、自己を歌う。

そして私が取るものを君も取るであろう。

私に属するあらゆる原子は同じく君のものだから。

と歌い、なおあらゆる人に米粒程も違いのない全く同じ自分を見るといふ意味のことをいっているように世の全ての人間の中に自我の影を見、なお自我の拡がりを経時的には縦に、空間的には横に、広く拡っていることを感じ、祖先の内に己が影を見、あらゆる人のみならず自然の到るところに己が影を見た。そして「神の霊は自分の霊の兄弟であることを知り、霊肉一致を説き、天地万物皆霊の現われ、自我の顕現と見た。しかも人間個人個人の個性性を尊重し、人間の共通性を重んじ、それを友愛によって柔らかに結びつけている。

かく自由、平等、友愛を尊重するデモクラシーの思想を彼は高々と歌いかつ説いたのであった。

憶えば、世人がかかると天才を誤解の内にしりぞけている時、Emersonと共にいち早くこれを発見し、高く評価した Thoreauこそ誠に天才を知る天才といわざるを得ない。